

令和5年10月3日

由利本荘市総合教育会議

議 事 録

□日時

令和5年10月3日（火） 午後1時30分

□場所

由利本荘市役所 4階 正庁

□出席者

市長	湊 貴 信
教育委員会教育長	秋 山 正 毅
教育委員会教育長職務代理者	佐 藤 道 昭
教育委員会委員	桑 山 明 久
教育委員会委員	小 坂 綾 子
教育委員会委員	佐 藤 美 帆

□案件

1. 報告
2. 意見交換
 - (1) 部活動の地域移行に向けて
～部活動を取り巻く現状と検討課題～
 - (2) 公民館での生涯学習事業の推進
～今後の公民館のあり方について～

(事務局職員)

総務部長	小 川 裕 之
観光文化スポーツ部長	高 橋 重 保
教育次長	木 内 卓 朗
総務課長	遠 藤 裕 文
教育委員会教育総務課長	三 浦 雄 一 郎
教育委員会主幹兼学校教育課長	倉 田 和 人
教育委員会生涯学習課長	三 浦 啓 助
教育委員会本荘教育学習課長	柴 田 浩 樹
教育委員会中央図書館長	越 川 憲 光
教育委員会学校教育課長待遇	小 松 貢 治
教育委員会教育総務課参事兼課長補佐兼総務班長	佐々木 夢 司
総務部総務課参事兼課長補佐	工 藤 将

遠藤総務課長

(開会 午後1時30分)

それでは、ただ今から、

「令和5年度 由利本荘市 総合教育会議」を
開会いたします。

はじめに湊市長より、あいさつを申し上げます。

湊市長

市長の湊です。どうぞよろしくお願ひいたします。開会にあたりまして、一言ご挨拶を申し述べさせていただきます。まずもって本日は、大変お忙しいところ皆様にはご出席をいただきまして、誠にありがとうございました。また、日頃より市政運営につきましてご理解ご協力いただいておりますこと、特に教育行政につきましては、本当に多大なるお力添えをいただいておりますこと、重ねて御礼を申し上げます。

今年度に入ってから、新型コロナウイルス感染症の位置付けも変わったこともあって、市内ではもう毎週のように様々なイベントが、こんなに由利本荘市にあったのかと。びっくりするぐらい、もう毎日行われておりまして、非常に市民の皆さんも大変楽しみにして参加してくれたりして、賑わいがすごく戻ってきたなということで大変嬉しく思っているところであります。特に小中学校においても、学校行事等々、例年通りに開催されてきているということもありまして、子供たちも大変楽しく過ごしているのではないかと考えております。そうした中でありますが、教育関係についてはやはり様々日々色々な環境等々の変化がありまして、市としてもしっかりとそういったものにも対応していかなければならないという思いを持ちながら、日々色々進めさせていただいておりますところではありますが、今年度にあっては、カダーレに教育支援センターを、様々なことについてしっかりと支援できる場所を開設させていただきました。ご案内の通り、ICT関係の教育についてもしっかりと進めさせていただいておりますし、コミュニティスクール等々、地域の方が学校にいろいろ関わっていただくということも大事だろうということで、進めさせていただいておりますところでもあります。そうしたことで市としても、なんとかしっかりとやっていこうということでやっている中ではありますが、課題もやはりいろいろと山積しているところでもありますので、今日はそういった課題についても皆さんと共有しながら、課題解決に向けての色々なご提言についてもいただきながら進めてまいりたいと思っております。

この後、大きく二つのテーマに絞って「部活動の地域移行に向けて」、「公民館での生涯学習事業の推進」、この二点について意見交換等させて頂ければと考えております。せっかくの機会でもありますので、忌憚のないご意見をいただきながら、有意義な会にしてまいりたいと思っておりますので、よろしくお願ひ申しあげまして、一言

ご挨拶とさせていただきます。

遠藤総務課長

ありがとうございました。

それでは、次第にしたがいまして、はじめに、教育長より報告をいただいた後に、教育委員会事務局より二件の話題提供の現状等を報告していただき、話題毎に、市長と教育委員の皆様による意見交換を行いながら、進めてまいりたいと考えております。

皆様におかれましては、ご自由に忌憚の無いご意見を出していただきたく、よろしくお願いいいたします。

なお、意見交換の説明時の資料につきましては、お手元に印刷したものを準備しておりますが、ステージ側に設置しているスクリーンにも映しますので、そちらをご覧くださいと存じます。

また、議事録作成の関係で、発言する際には、マイクを使用させていただきますようお願い申し上げます。

それでは、以後の進行については、市長に行っていただきます。

市長、よろしくお願いいいたします。

湊市長

はい、それではこれから私の方で進めさせていただきたいと思えます。

ただいま説明がありました、この次第に沿ってまいります。2番、報告について教育長よりお願いします。

秋山教育長

私の方から報告をさせていただきます。小中学校では今週10月6日が前期の休業日で、10月10日から後期の教育課程に入ります。今年度は、前期において、学校生活も、徐々に日常を取り戻し運動会とか集団下校、文化祭など学校行事を無事実施してきたことは、子どもたちの成長にとって、とても喜ばしいことだと思っております。これから後期に入り、子供たちはまた一段と大きく成長する時期を迎えます。学びの充実とともに、次の学年に向けて、そして卒業式や修了式に向けて目標を持った学校生活を送ることができるよう、市全体で学校を支援していきたいと考えております。よろしくお願いい致します。

先日の教育委員会でも話していますので、細かい報告はありません。まずここまでにさせていただきたいと思えます。よろしくお願いい致します。

湊市長

それではただいま教育長より報告がありましたが、皆様からご意見、ご質問があればお伺いしたいと思えますが、何かございますでしょうか。

【質問、意見等特になし】

湊市長

ないようですので、次は意見交換の報告をしてもらうことでよろしいですね。それでは教育委員会の方からお願いします。

倉田主幹
兼学校教育課長

それでは、話題提供 1. 部活動の地域移行に向けて、部活動を取り巻く現状と検討課題の説明をいたします。

はじめに 1. 部活動を取り巻く現状についてであります。ご存知の通り、生徒数の急激な減少によって中学校では深刻な部員不足となっております。

市内の中学校の状況ということで、一部状況をお示ししております。こちらにあります、9月現在の部員数というのは、夏の総体で3年生が引退し1・2年生による新チームの状況となります。

秋季大会の合同チームをご覧ください。野球の3つの合同チームをはじめ、合同チームは11という状況でございます。野球、男子バスケ、バレーボール、ソフトボール、サッカーでは市内を越えて、にかほ市の中学校と合同チームとなるなど、さまざまな形がとられております。

また、総体を終え3年生が引退したことを機会に大内中では男女バスケットボール部が廃部となり所属していた部員は現在、クラブチームで活動しております。

部活動の休部・廃部による生徒の体験格差の拡大が広がり、希望する部活動で活動できないなどの課題も見られます。また、各学校の生徒数の減少は教職員の減少につながり、かつてのように監督と部長の2人体制をとることが難しくなっております。

一競技一部活動担当という状況は、教員に大きな業務負担となっております。

続いて 2. 県の取り組みについてです。

(1) の地域運動部活動推進事業とは、休日の段階的な地域移行のモデル地域として試験的に実施したもので、今年度は大館市、能代市、羽後町で行われております。昨年度実施した羽後町と大館市では、羽後町で男子バスケ、ハンドボール、柔道。大館市で柔道、陸上、水泳、卓球を対象として、休日の地域移行を進めておりました。

昨年度実施した2市町の成果課題ではありますが、成果としては関係者に部活動を地域移行する必要性について周知が進み、方向性を共にすることができた。生徒は、より専門的な指導を受けることができた。指導経験のない部活動担当者の心理的負担が軽減された。地域と学校の共同により、生徒を育成することができた。などがあげられており課題としては関係者との連絡調整、連絡体制の構築、指導者の確保、困窮世帯への支援方策、地域特有の課題への対応な

どが挙げられておりました。

(2) 部活動指導員の配置を県では進めております。本市では、6名の指導員を5校の中学校に配置しております。県は、将来的には各中学校に1名の配置を目標としているということでございました。

(3) 地域移行推進計画バージョン1を8月30日に策定しております。この推進計画には、県と市町村の年次目標が示されており、市町村では今年度協議会を設置、来年度には推進計画を策定、令和7年度末には一つ以上の地域クラブ活動を段階的に開始するよう示されております。

続いて3.市の取り組みについてです。

(1) 部活動指導員の積極的な採用です。部活動指導員は担当指導者に代わり、大会引率が可能な外部指導者です。教師の業務の負担軽減と生徒への専門的な技術指導の充実が期待できます。次年度に向け、現在配置されていない学校の希望を今後募っていく予定であります。

(2) 実務者会議の開催です。教育委員会と文化・スポーツ課において実務者会議を実施し、横断的検討組織として連絡を密にして進めているところであります。

(3) 情報交換会の開催です。スポーツ少年団や部活動の指導経験者等との情報交換会を開催し、地域移行に向けた動き、今後の方向性、課題や要望等を情報共有する機会とし、今年度1回目を9月20日に実施しております。今年度これからの予定となります。

(4) 地域移行協議会の設置です。国や県の方針を踏まえた市の方針や方向性の検討。国や県の推進計画等参考にした推進計画の策定。方針の実現に向けた地域における関係者の連携共同体制の検討。学校部活動の地域連携地域移行に向けた課題の洗い出しなど、地域移行に向けて協議を進めてまいります。構成メンバーについては現在検討中ではありますが、学校教育課・文化スポーツ課・市スポーツ協会・校長会・教頭会・PTA・地区中体連・スポーツ少年団などを予定しております。

この協議会の方針を受け、(5)にありますように関係機関との連携推進を進めてまいりたいと思います。以上で、話題提供1の説明を終わります。

湊市長

ありがとうございました。ただいま説明が終わりましたが、せっかくの機会ですので、皆様から順番にご意見やご質問等をいただいてまいりたいと思いますので、よろしくお願ひします。はじめに、教育長からお願ひします。

秋山教育長

中学校の規模が全部小さくなってしまって、市内の本荘の中での

中学校もだいたい3クラスにこれからなっていくです。その他の地区は各学年1クラスになっていくということで、そこでの先生方の指導者としてのキャパが非常に小さくなってきます。特に、先生が少なくなるということは競技の専門性を持った人が教えることが非常に難しくなっているということで、子供たちのニーズはやっぱり専門的な指導をしていただきたいというのに対して、なかなか先生たちがそういうふうには追いついていけないという現状があるのではないのかなと思っています。

それから、先生に限らずに、様々な職種で勤務時間のあり方っていうのが非常に大きな問題になっていて、また日本っていうのは、小中学校の先生が子供たちの部活動というか、そういうところを指導してフォローしていくというのがずっと歴史的に続いてきたのですけれども、ここに来てその見直しが図られるようになってきています。学校の先生もその職としてスポーツや文化の指導を求めらるっていうことが非常に難しい現状なのかなと思います。私が小学校で勤務していた最初の頃というのは、学体連っていう小学生も今の部活と同じような形で指導していました。それこそ土曜日、あの頃は学校があったので、日曜日まるまる部活練習で、そういうことがもう非常に厳しい状況になってきているのではないかと思います。その後スポーツ少年団に代わって先生の指導から、小学校は地域の指導者に変わっていきました。ただ、中学校については小学校と違って専門性を求められていくので、指導についても簡単に誰かがやってくればよいというわけにはいかないの、そのあたりも今後の課題になってくるのではないかと思います。まずやれるところを丁寧にやって、子供たちの成長第一に考えていきたいと思っています。

湊市長

ありがとうございました。それでは佐藤教育長職務代理者お願いします。

佐藤教育長職務代理者

この件につきまして、私の方から2点ほど質問を先にさせていただきたいと思います。

まず学校側の教師は今後どのようにこの部活に関わっていくのかという点です。その予定を教えてください。それからもう1つは部活指導員の方々に対する報酬というのはあるのかどうか。またその場合はどこからそれが出されるのかという点でございます。

では、まず先に、質問は後で答えていただいて結構ですが、私の方からの意見と申しましょうか、感じたことを申し上げます。この部活を取り巻く現状で今は、例えば東中と、にかほ市という遠距離であったりします。これがもし地域移行になれば少ないところのみが集まるのではなく、その地域毎のまとまりで人数がまともにいる

ところでも他の少ない地域から入ってきて一緒に行くという方法を取った方がよろしいんじゃないかなと思ったところがありました。いわゆる地域割をして、それで合同チームを作るというのがいいのではないかと、できるだけですね。あとは、例えば、にかほ市からこちらに来るといのは大変でございましょうし、また、教育委員会が実は違ったり、先生の異動は一緒ですけども、そういう点がありますのでもし可能であれば、にかほ市は、にかほ市で、先ほど申しました多いチームであっても、そこに少ない人数を入れての合同チームを作るなりして行ったほうがいいのではないかなというの私の感想であります。3の(4)にあります支援の体制でございしますが、その取り組みの支援ですが、例えば家庭に対する支援の1つとしまして、交通手段のサポートというのは当然必要だと思います。

子供たちが移動するのに必ず親がそれを全部面倒みなければならぬという家だけではないと思うのですね。できない家もあります。そういう点に関しまして、支援というのは必要ではないかなと思いますので、この点、意見として申し述べさせていただきます。

以上です。

湊市長

ありがとうございました。まず、質問2点について担当からお願いいたします。

倉田主幹
兼学校教育課長

今ご質問がございました部活動指導員についてであります。こちらの方は、報酬が発生するような形となっておりますので、この後、当然増えていった際には、報酬の方もさらに必要になってくるということは、予想されることとございます。

秋山教育長

今の国の方向性でいけば、土曜日などの休日に関しては、その委託された方が指導に入って大会にも行く。平日は学校の先生がいるという、そういう二分化した形を計画では持っていますが、私たちの実際に考えているところは、子供が普通の通常練習の時には先生からの指導と、実際の大会の時に違う人の指導でやっていけるかと。ここも含めて今後どういう形で持っていくか、非常に課題だなと、教育委員会の中ではそう考えています。

湊市長

それでは順番に行きたいと思います。次、桑山委員お願いします。

桑山委員

だいたいの方向、流れというのは十分よくわかります。子供が少なくなるとチームが作れない、でも子供たちにはやりたいスポーツ

をできるだけやれる環境を作りたいと。その中で、教師の働き方改革、負担も減らしていきたい。この辺の流れはもう十分よくわかりましたので、こういう方向になっていかざるを得ないということ、むしろそれを、仕方の無いこと、できればそうじゃない方がいいってということではなくてですね、これをもっと児童生徒、自分の学校の中だけではなく、地域全体の中に広げるという転換点になっていければいいなと思います。というのは、スポーツというのは、愛国心、オリンピックとかですね、国際大会で行けば愛国心の高まりになってくるし、これが学校の中でのスポーツになってくると愛校心の高まりになっていくと。今までのスポーツ競技、学校対抗であれば、自分の学校を一生懸命応援したけれども、今度はそのチームに他の学校の生徒もいるというところで、これまで単純に自分の所属する学校を頑張れということから、少しはみ出た視野を持たなきゃいけなくなると。その方向に、発展できる方向に子供たちの意識を持っていけるか、そういうことも考えなきゃいけないなと思っていました。

それと今回、外部の指導者については、やはりその指導者の資格ですね。どういう人を指導者として迎えるのか。特に部活でよく言われているのが、暴力ですよ。暴力的な指導でこういうことは絶対にあってはならないだろうし、それから、あるいは教師ではなくなる部外者なわけですからそこで父兄から我が子をなんとか出してというような、そういう私情を挟んだところ。指導者に対する手当も十分に行っていただきたいし、指導する前に絶対これだけは守ってもらいたいというところをきっちり確認していく必要があるだろうと思います。うまく行くかどうかについては、僕はもう90%指導者にかかっていると考えています。それから、従来のスポーツ少年団、あるいは学校の部活でよく僕のところに来るのが一人親世帯のお母さんが子供の送り迎え、あるいは応援とかですね。そこで自分は仕事をしなきゃいけないと行けない。事情があって行きたいのは山々だけど、行けないことを逆に白い目で見られて、いつも何も手伝ってくれないというようなことで、すごく肩身の狭い辛い思いをしているということで、先ほど道昭委員からもありましたけど、送り迎えの問題とか、保護者の負担の軽減ですね。そのところをどうやってそのチーム内でですね、みんなが公平感を持てるように、行けない人は行けないんだよねっていう、そこはじゃあ行ける人でカバーしなきゃっていうことをですね、親の成長の場でもあるというような視点でうまく話し合いの席とかですね、その運営委員会のようなものを同時に作っていったらいいなと思います。

湊市長

ありがとうございます。それでは順番にお伺いしてまいりたいと思います。次に小坂委員お願いします。

小坂委員

私もこの方向は進んでいかなければいけない方向だと思っております。その中でこれまで教師が指導してきたことで何が良かったか、あるいは、なぜ保護者はスポ少に移行する時に、保護者の悩みはやっぱり学校の先生に指導してほしいという声が多かったです。それはなぜかということを見ると、先生たちはスポーツ面だけではなく、日常生活の中で子供一人一人の性格をよく捉えていて、その子にあった指導を部活動でも行っていたからではないかということが考えられます。そこでこの方向で進んでいった場合には、まず教師がこの指導者に任せっきりではなく、やはり技術面の指導以外の面で部長的な関わりとして、必ずその部活動の中に教師の配置があるような、そして子供たちの性格を知って、その子供たちを生かせるような、そういう関わりができる仕組みを考えていかなければいけないのではないかと思います。そうすることで、保護者も安心し、また指導者の専門的な力もより発揮できるようになるのではないかと考えます。

また、同じように子供たちや保護者は指導者が変わることで、いろいろな悩みを持ちますので、その悩みを引き受ける、聞き取る受け皿も最初から組織の中に作っておいて、悩みを話したり聞いたりあるいは大きなハラスメントが起きた場合には、すぐに解決できるそういう組織をはじめから作っておいてスタートするべきではないかと考えております。そしてやっぱり一番今でもそうなんです、先ほど桑山委員からお話がありましたように子供の部活動に協力できない家庭環境の保護者は、最初からこの部活動に入らないように子供に話をしたりして、それが今の文化部の人数が大変増えている原因の1つではないかと思います。そういう面で、子どもたちが公平に自分の本当にやりたいことを選ぶことができる。そういう環境を作るには、やはりあまりに保護者が部活動に関わりすぎて、大会の応援の運営とか、そういうことがなされすぎていることで、逆にできない親が凹んでしまうような、そういう引け目を感じてしまうようなことがないように、すべて学校でやった時と同じように、あまりに保護者に力をいただかないような、それを組織の中で、子供たちができることは子供たちがやって、学校でできることは学校でやってというような組織を作ることで、保護者が送迎をできない家庭でも自分がやりたいという運動を選ぶことができるような、そういう環境を、これはせっかく新しくなるのでそういう子供たちの夢や願いが叶えられるような環境にしていっていただければと思います。

湊市長

ありがとうございました。それでは佐藤委員お願いします。

佐藤委員

私の方からは部活動の地域移行に向けてということで、今様々な意見を聞かせていただきましたが、教師側というか、先生側も働き方改革で不安なく我が子を育てられるような体制になるといいなと思っております。実際にあった話なのですが、我が子が部活に入るタイミングで、女性の先生はとても戸惑ってしまう。それこそ自分の部活を持っているから、土日応援に行けないですとか、この保護者との関わり合いでLINE交換をするのにためらってしまうとか、そういった話を聞いたことがあります。ですから、やはり、先生たちも一人の人間として子どもを育てている人であるということ尊重していけるような体制を、この部活動の地域移行の中に盛り込んでいけたらなと思っております。

そして主役は子供であるということ絶対に忘れてはいけないなと思ひまして、先ほど小坂先生からもありましたが、やはり熱が入ってしまって、もう我が子を試合に出したいという気持ち、出して欲しいという気持ちはどの親御さんもあるんですね。やっぱり小さい時から育ててきて、その子の良さを一番わかっているのも親御さんですから。ただそれがエスカレートしてしまった時に、コーチの自宅に電話をかけてしまうとか、そういったこともなくはないんですね。それが、学校の先生であれば、どこかでブレーキがかかるんですけども、一般のコーチということで、年齢的にも、自分たちより下であるということも少し影響あるのかもしれませんが、実際そういう行動に出してしまう親御さんも少数ですが、やっぱりいらっしゃいます。そういった時に介入できるのが学校なのか、教育委員会なのか、そもそもそんなところまでそういう小さな揉め事のお話が届くのかどうか。ご本人達は、ものすごくヒートアップしているので、大変なことだと思って、日常の時間を割いてそのことと向き合うと思うんですけど、なかなか解決というところに結びつかなくて卒業までしこりが残ってしまうということも実際にあります。そういったところも少しなんらかの手段でフォローしていければいいのかなと思っております。

湊市長

大変ありがとうございました。4名の皆様からお話を伺いました。私も市長の立場というか、私の方からも少し。今、皆さんからいただいたお話を聞いて、私も全くその通りで心配になっています。実は、私ども市長、秋田県では市長会っていうのがありまして、市町村長さんたちと一緒に集まって県知事も含めて皆さんと一緒に行政的な会議がありまして、この話題もやっぱり出てきます。

今、いろんなお話が出た中に、例えば、足の確保であったり、いろんな課題がある中で、市長は市長同士の中で、それぞれの市同士で地域格差が出ないようにしなければというのは、すごく気になっていて、例えばですが、市の規模や人口などによって違うでしょうけど、しっかりと指導者が見つけられ、見つけられてというか、い

てやれる部活、例えば野球部がしっかりできるっていう市もあるでしょうけれども、そうでないところも当然出てくる可能性があるだろうと思います。そういった地域格差であったり、あと保護者の皆さんの負担、費用の違いだとか、市によってそのそれぞれでばらつきが出てくるということについては、やはり心配なことです。会議の中では、市長会としてそういうことがないように、県や国に、例えば働きかけるだとか、今の地域移行については、やっぱり県が少し指導的というんでしょうか主体的というんですか、そういった形で県が少し旗を振っていただいて、市町村はばらつきがないようなことをしっかりと対応してほしいといったようなことも。今、色々と要望したり、話し合ったりしているところであります。県の方もこの話については十分理解してもらおう。そして、今度は、県は県で県同士の格差ということが出てきたりしてですね、なかなか今回急にこの話が出てきましたけれども、唐突感がありましたし、なんていうのでしょうか、うまくこの行き先がですね。パッと良くなっていくというのはなかなか見通せないというか、やっぱり各市町村、県も思っているなど感じたところでもあります。

まずは今、皆さんから私の意見も含めて、先ほど、佐藤教育長職務代理者から、地域ごとのチームの作り方、交通やいろんなところからの支援なんかもやはり必要だろうという話であったり、桑山委員から愛校心の関係。やはりそれもそうだなという感じもありますし、佐藤委員からは少し私情をですね、現実にきっとあるだろうなとかですね。小坂委員からはやはり現場におられた方ということもあって、子供たちの性格を知っている人が指導する安心感等々についてですとか。部長的な役割で高校あたりは割とそういうものがあるかもしれませんね。送迎のことについては、先生も一人の親としての立場であるということであったり、いろいろなお話を出していただきましたが、皆さんから色々とお話を伺った中で、この辺はフリーな感じでいいと思いますが、何か今の話をもって、何かご意見とかあれば伺いたいと思いますが、何かございますでしょうか。

桑山委員

由利本荘市では全小中学校で学校運営協議会、コミュニティスクールが組織されているんですね。この部活動に関しても、今度は学校単独ではなくて、学校間でのチームということにもなってくるんですが、そこにコミュニティスクール、学校運営協議会が何か協力できるところ、連携を取れていけないかなということは今、ちょっと考えたんですけどね。

湊市長

そういう可能性って、何か模索できたりするんですかね。

秋山教育長

各学校には学校運営協議会の中で話をしてほしいと投げかけています。その中でどんなことができるかをまずは出してもらうのが1つかなと思っています。それから地域を越えた形で、私たちが今イメージして一番早くやれそうなのは、例えばボート、今は本荘南中学校にボート部がありますけども、実は東中にも北中にもやりたい子供って実はいるので、本当は学校を越えた広域化ができればとずっと思ってる部分もあります。そういうところは早めにやっていけるかなとは思っています。これからいろんな部活、卓球1つにしても、その土地土地で全く仕組みが違って、協会の中で話をすれば進むという形ではないことも現実としてはあるので、そのへんも踏まえながらほんとに丁寧にやっていかなければならないなと思っています。

湊市長

わかりました。他に何か。はいどうぞ。

佐藤教育長職務代理者

やはり、由利本荘市の場合は広さっていうのが一番ネックになるんですよね。ほかの市町村であれば比較的近場が多いですから、1つの地域に全部集まってまとまったチームは作りやすいと思います。この地域に関しましては本荘でやったとすれば、矢島、鳥海、東由利が大変ですし、やはり先ほど私たちが申した通り、それぞれの地域である程度は、地域分けしてやっていくしかないと思いますので、その点の地域分けと、そしてどうしても先ほど言いましたボートの場合、例をとりますと、例えば遠隔地であってもやはりやりたいという場合もあるでしょうし、その場合、先ほど皆さまからも出ました、交通手段っていうのもやはり大きなネックとなりますので、その辺、結局お金が絡む問題ですが、支援に対する準備というののもあっていいのではないかと考えております。いずれこの地域移行に関しては、やはり進まなければならない現状にありますし、進めるべきことであると思いますので、それにかかる資金、報酬も含めた、そういう経費的な面も十分に考慮しながら準備していくしか方法はないと思っています。また、お二方からありました、先生方がやはり関わってくるといことになりますと、やはりこの今の働き方改革とはまたちょっと逆行するような形になってしまいます。先生方の負担は簡単には減らないと思いますが、そこをどうするか、この折り合わせというか、その辺もまたこれから考えていただきたいと思っていますので、よろしくお願ひします。

湊市長

本当におっしゃる通りですね。この広大な面積、確か由利本荘市は南北に65キロぐらいあるんですね。縦にですね。横で30キロぐらいだったか、それぐらい東西があつてですね。市の端から端ま

でもう3時間位かかる、よく神奈川県の中位位の面積だといいますが、併せてですね、最近私が言うのが、沖縄本島とほぼ一緒なんです。面積が沖縄本島よりちょっと広いぐらいあってですね、本当に広大な面積を持っているので、一つになるとなかなかやはり大変な要素はあります。

それから、由利本荘市内にはスクールバスが34、5台あるんですね。多分、この数も結構、他よりは多いのかなと思います。そうしたスクールバスの活用、運転手さんとの兼ね合いも、バスだけあればいいってことではないんでしょうから。また、費用についてもどうするかという問題もあります。バスの数であれば多く持っている市でもあるので、うまく活用できればですね、子供たちの移動についてもフォローできていけるのかなと思いますが、次長の方から特に何かありませんか。

木内教育次長

スクールバスは、市長がおっしゃる通りたくさんありますが、それだけ費用がかかるというのはあります。それは大きな課題なのかなと思いますけれども、一定の方向に行くルートさえ決まれば、比較的合理的に、例えば鳥海から本荘までとか、途中で拾って行ったりとかいう形でできるのではないかなと思います。併せて公共交通機関があるところはそういったものも利用できるのかなと思っております。由利高原鉄道もしくはJR、路線バスといったところもその時間帯に合わせてダイヤを多少変更するとか、もちろん協議は必要だと思いますが、そういったところを調整して少しずつクリアしていければいいかなと思います。

湊市長

他に何かございますでしょうか。はい、どうぞ。

佐藤委員

私の方からは特に本人からの自己申告とか刹那的な活躍以外の部分、部活動でも子供たちの活躍しているところを正確に情報を把握していくことが、学校側でまた少し難しくなっていくのかなという不安は1つあります。日常生活をよく見ている、先生たちではあります、日常生活でははっきりわからない、部活動で目覚ましい活躍をする生徒さんっていらっしゃると思うんですね。それがまた得点を決めたですとか、まあ、なんというか、自分で先生、僕、こんな活躍をしたんだよって言える子でしたらいいんですけども、そうではなくピンチの場面での声かけが素晴らしい子ですとか、あとはスター選手のフォローが得意な生徒ですとか、そういったところも成果といいますか、そういったところを正確に把握していけるような、何か方法があるといいのかなと思っております。

湊市長

なるほどそうですね。確かに例えばバスケットでもゴールを入れるだけではなくて、そこにうまくパス、サッカーも一緒ですかね。そういうスターの陰にというか、やっぱりそういうところっていうのは大事でしょうね。

大体いいでしょうか。そうすれば、いろいろな話が出ましたが教育長から何かありますか。

秋山教育長

まずは、この部活に関してはある程度、ここ数年かけて形を作っていくことで協議を進めてまいります。今出てきた中で1つ、すぐにでも対応しなければいけないなと思ったのは、困った時の窓口をどう持っていかってというのはすごく大きいことで、学校の先生に言える子もいれば言えない子もいて、そういう子たちのフォローをするためにも、支援センターなどの窓口とかが大きくなっていくのかなと思うので、その辺の役割は明確に作っていかなければならないと思いました。それから一人親世帯、要するに子供になかなか関われない親とか、それから勤務時間が今すごく多様なので、子供に合わせた生活ができない保護者の方もたくさんいらっしゃいますので、そういう子どもたちをどうやってフォローしながら、自分のやろうとすることに向かっていけるような状況をつくっていくかというのは、本当に知恵を出して考えていかなければならないと思います。スクールバスの活用も本当に必要だと思いますが、スクールバスも実際は運転手さんが高齢化していてなかなかその後の仕事が大変だったりするという現状があって、それらもいろいろ考えながら進めていきたいなと思っています。あと、その子供の活躍っていうのは、やっぱり逃さずに拾ってきちっと評価してあげられる仕組みっていうのは、今でもやっぱり見落とししてしまうところもあったりするので、そういうことのないように本当に考えていかなければならないので、引き続きご意見をいただきながら進めてまいりたいと思います。

湊市長

ありがとうございました。皆様からいろいろとご意見をいただきまして本当にありがとうございました。様々な課題があるなと思いますし、ただ一番、やっぱり子供たちがしっかりと満足いくこともできるようにするというのが大事だろうと思いますので、私も市長の立場としては先ほど言ったような、そちらの立場でも、意見をしっかりと伝えてまいりたいと思いますし、この後はまた色々と皆さんからもご意見をいただいたり、関係機関としっかりと関係を持ちながら進めてまいりたいと思いますのでよろしくお願いします。

それでは、「部活動の地域移行に向けて」ということについては以上で閉じさせていただきたいと思います。

三浦生涯学習課長

次の話題になります。「公民館での生涯学習事業の推進について」を話題にさせていただいて、同様な形で進めさせていただきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

それでは教育委員会から説明をお願いします。

それでは続きまして話題提供の2、生涯学習課より、公民館での生涯学習事業の推進として、話題提供いたします。

はじめに本市の公民館の概要であります。組織として、旧市町単位での公民館8館と、本荘、大内、鳥海地域に、地区公民館として10館があり、生涯学習課と各教育学習課で管理運営しております。生涯学習事業、いわゆる公民館事業ですが、それぞれの館において、地域のニーズやその時々話題などを取り上げて、「公民館運営審議会」や「町内公民館長会」、「生涯学習奨励員」、「生涯学習ボランティア」などの関係団体や指導者の協力を得ながら実施をしているところです。

参考までに、今年度の「由利本荘市の教育」に記載の、社会教育・生涯学習事業は231事業となっております。

このほかにも、大小さまざまな、教室等の事業も行っており、公民館事業の他にも、各団体、サークル活動の支援も行っております。公民館事業での課題といたしましては、人口減少や高度情報化の急速な進展などの、社会情勢の変化を背景に、事業への参加者が少ない。指導者が高齢化している。インターネットの普及、特にスマートフォンによる、YouTube や SNS など、多くの情報が、その場ですぐ手に入ることにより、公民館に出向かなくても、学習が出来る環境となっている。

この他、市民のニーズが多種多様化しており、それぞれで求めるものが異なるため、公民館で何かを学ぼうという時代ではなくなってきた現状があります。

このため常に多くの課題に対して、さまざまな視点から検討し、創造していくことが求められています。

これまでも「社会教育委員会」や「公民館運営審議会」、「生涯学習推進会議」など、多くの場で、これらの課題に対し、これからの公民館事業はどうあるべきかとの協議がされており、

①特色ある事業の積極的な推進 …… 一般的な事業から、地域特有の事業へ

②自主学習への支援強化 …… 学習の提供より、自主活動の支援の強化へ

③民間力・地域力を活かした事業の推進 …… 地域＋行政が主導していた事業に民間の力をプラス

④情報化社会を利用した事業の推進 …… 開催の案内から、事業の経過や報告などもお知らせし、次回へ繋げる。

⑤地域間の連携強化 …… それぞれの公民館事業を、他の公民館

と連携して行う。

このように、大きく5つに分けて、検討されております。

それぞれ、内容につきましては、

- ・地域の行事、歴史、文化、芸能、郷土食など、ここだけの特別を創る。事業のブランド化。

- ・自ら学ぶ活動への支援として、知識や技術を持つ方の紹介。場所や備品等の提供。

- ・各団体や企業、また、県立大学や市内の高校との共同による事業。GCF（ガバメントクラウドファンディング）などの創出。

- ・情報化として、次につなげる情報の発信。事業や指導者の紹介、講話の配信などを行うデジタル公民館の開設。

など、さまざまなアイデアをもとに、ご意見をいただきながら、検討や実施を進めており、中でも、地域間の連携意識の強化につきましては、参加者の減少やスタッフの充実化など、それぞれの公民館で持つ課題に対して、複数の公民館が連携して対応することを想定し、現在、矢島公民館と由利公民館では、小学生のキャンプ事業を共同で開催しており、また、岩城公民館と西目公民館では、高齢者向けのスマホ教室を合同で開催するなど、地域の枠を越えた連携による事業を行っております。

このように、複数の公民館が事業を連携して、計画・実施する体制づくりを構築することにより、新たな視点と発想力。人材の発掘と育成。地域住民や公民館職員のスキルアップなどが見込まれ、新しい原動力につながるものと考えております。

ただし、このような地域の枠を越えた連携事業を進めると、これまで参加していた地域の公民館事業が失われるのでは、との心配もされているところもあります。

地域における公民館は、地域住民の最も身近なコミュニティの拠点であり、人と人をつなぐ「ハブ」として、重要な役割も担っておりますので、公民館事業は複数の公民館が連携しながらも、地域に密着した公民館でなければならないことが前提となっております。最後の資料となりますが、今後の公民館事業の取り組みとして、このような視点で事業を計画しておりますので、例として記載させていただきました。

最後に記載があります「新型コロナウイルスを契機にして広まったオンラインの良さ」や便利さの一方で、「対面でないと得られないリアルな人とのつながりの大切さ」も、コロナ禍を経て再確認をしたところであり、担当職員の話し合いの中で、改めて、この意識を共有したところでもあります。

「アナログ」だけではなく、「デジタル」だけでもない、これまでと、これからの融合した「ハイブリッド」の公民館として、これからの公民館・公民館事業のあり方として示させていただきました。以上、公民館での生涯学習事業の推進につきまして、話題提供をいたしました。

湊市長

ありがとうございました。ただいま説明が終わりましたが、先ほどと同様の感じで進めてまいります。まずは教育長からお願いします。

秋山教育長

ではまず私の方から。結構なんというか個人的な思いなんですけれど、小学校時代の学びってというのは、自分の見方とか考え方を広げたり高めたりする、そういう時代ではないのかなと思ってます。じゃあ、大人になってからの学びって何なのかなってというのは、人生を深めて豊かにしていく、そういう学びなのではないのかなって。そういうものを作っていくっていうのが私たちの仕事ではないのかなって感じています。私、若い頃に理科センターにいたんです。その時に空気ロケットとか、それからプロペラ動力の飛行機とかいろんなことをセンターでやりましたし、由利原でもやったり、いろんなところでやりました。その時に子供だけではなくて、親子で来て一緒に活動して作ったりとかして、その時に子供が喜ぶだけでなく親も喜んでくれる、大人が喜んでくれる、そういうのを見てるとなんというか、大人になっても学ぶ喜びってというのはやっぱり笑顔をもたらすんだなって強く思いました。水生生物を小川で採取して、親子で見たりしていると親の方がすごいキャッキョッと喜んでくれたりするんですね。そのような学びの機会っていうのを、こういう公民館活動の中とかでも作っていければいいし、今の私たちの生涯学習のところって、その世代の関わりって非常に薄くて、その人たちの活躍とか、そういうものが大きくなればいいなって思います。今、お話したことも含めて層としていろんな機会を作っていくっていうのを一緒に考えていければなと思ってます。

湊市長

ありがとうございました。それでは、また委員の皆様からですが、先ほどと順番を逆にさせていただいて、佐藤委員の方からお願いします。

佐藤委員

それでは私からですね。ハイブリッド公民館、すごくいいなと思いました。このハイブリッド公民館というのは、自ら考えられたワードでしょうか、元々あるものでしょうか。

三浦生涯学習課長

このハイブリット公民館という名称ですが、担当課が集まりまして、いろんな話題の共有をかけております。その中で出た言葉でありまして、それが一般的かと言われると、ちょっとハテナがつくん

ですけれども、その会の中ではハイブリッド公民館っていう形で捉えさせていただいておりました。

佐藤委員

ありがとうございます。ハイブリッド公民館なんですけれども、おそらくあのソサイエティ5.0に近い考え方かと思ひまして、まあサイバー空間とフィジカル空間を高度に融合したシステムによって実現していくということで、実際、今、若い世代と言ったら、ちょっと言い過ぎなんですけど、全然若い人だけじゃなく、シニア世代もなんですけど、やはりSNSの盛り上がりを通じて、実際に人に会って体験する。予習をしてからそこで体験するっていうことも大変流行ってしまっていて、今までだとむしろ何か活動があって報告するっていうのが一般的だったと思うんですが、こういう活動をしているよっていう情報提供が先に来て、わくわくしながらそこに参加する。そういうシステムもあってもいいのかなと思ひております。そしてこのハイブリッド公民館というこのワードを自ら作り出せるような、そういった人材が由利本荘市にいらっしゃってとっても嬉しい気持ちです。

湊市長

ありがとうございました。ソサイエティ5.0、さすが最近の方って感じでいいですね。それでは小坂委員お願いします。

小坂委員

鳥海にいる私の母は公民館の事業で紙テープのバッグを作ったり、様々な手芸を公民館で学んだことを生かして、ずっと何年間も続けて、そしてプロのように上手になって生活を豊かにしておりました。その母は紫水館はすぐ近くなんですが、どうして公民館事業に行くかという、地域の方が車でお迎えにきてくださって、そしてそこに行って地域の皆さんとお話をしながら、様々なことを学ぶということを生涯の楽しみにして、本当に良い勉強させていただいたし、人生を豊かにさせていただいたなということを感じております。本市の様々なこの催しは非常にレベル的にも高く人気の高いものが各公民館にいくつかあります。それで私は日頃からこの移動市役所という考え方がとても地域の方に良いことだなと思ひてはいるんですが、そこで今思いついたのは、移動公民館っていうのもあっても良いのではと思ひました。だから例えば今は鳥海で人気のある内容を各公民館で実施していくということで、公民館まで遠い人もいるかもしれませんが、それでもやはり自分の地域の公民館が一番近いと思うんですね。高齢になればなるほど、やっぱり近くであることもありがたいと思ひますし、そして何を学びたいという意識よりは、みんながいるから楽しみだということ、そして中身が有効であれば、それをずっとこう続けてやって、そして自分の人生を豊

かにできるという、本当に素晴らしい内容が多いなということをつくづくいつもお話を伺いながら感じています。ですから、この公民館事業で人生が豊かになっている方はたくさんいらっしゃると思うので、その人気のメニューを是非、各地域に行って各地域の方々にさらに知らせてほしいなと思います。それから、今回ネクタイを活用したバッグ作りがありまして、説明を聞いていいなと思ったんですけど、私はちょうど予定あつて行けないんですが、そういう内容が先ほど後にデジタル的に作り方とか、そういう内容をホームページにアップすると、その時参加できない人もそれを見ながら次ある時にやってみたり、あるいはやってみただけではわからなければ今度はやっぱり参加しようと思ったりで、一回だけではなく、やっぱり地域の方々には繰り返しこういう会があるよということを知らせて開催していただければきっと残るものもあるし、素晴らしい活動になっていくと思います。それがたくさんのところたくさんものを作らなくても、一箇所でも1つ素晴らしいものがあると、それをこう移動して、互いに情報交換することで、質の高い活動になっていくのではないかと思います。

湊市長

ありがとうございます。 それでは桑山委員、お願いします。

桑山委員

公民館活動について、あまり参加したことがなくてですね、いつも定例会で各教育学習課の報告の中に公民館活動があつて、おお、こういうこともやってるんだ、いろんなことをやっていて良いなと考える程度でですね。今回、この課題に注目してみると、参加が少ない、あと指導者の高齢化っていうのがまず挙げられてました。人口減少、少子高齢化っていうことですね。そもそも考えると公民館っていうのは何のためにあるかということ、そこの公民館のある地域住民のために様々な活動を行っていくと、それで今、どういうことが求められているんだろうかということ、ここに書いていることみんな、本当によくやっているなど、そういう感想なんですけど、あえて何か役に立つようなことは言えるかどうかは分からないんですけど、考えていることは実は認知症初期集中支援チームってのがありまして、実は数年前からそのチーム員になってまして、今年度は全然相談がないんですが、前年度は結構相談があつて、一年間で3名から4名ほどのケースを、会議を開いてどういう支援をすべきかということをやってたんですけど、そこで取り上げられるケースっていうのは、介護認定も受けていない、医療機関にもつながっていない。だけど、その近所の人から見て、あそこはなんとするんだろうということから勧められて、地域包括支援センターに相談に行ったという方で、そこ方の話し合いを行う、会議を行うケースとして取り上げられた人なんですけど、そこに上げられなくても認知症の

問題というのはこれから非常に認知症は増加すると言われてるので認知症カフェとかですね、民間でやってるところもあるんですが、そこは定期的に、生涯学習課とか、そういうところの支援なしでやってるところが多いんですが、公民館をその認知症についての地域での活動拠点にできないだろうかというのが、僕の仕事の関係からちょっと考えたことです。

それから、今オレンジプランっていうのがあって、そのオレンジプランっていうのは認知症になったとしても、今まで住んでた地域でその人らしく生活が続けられるようにっていうのが一番大きな目標になっています。

その中で公民館っていうのが何かこう役に立つような行動、活動ができないだろうかというのの一つですね。そう考えてみると、いろんな、その地域で何か手助けが必要な問題っていうのいろいろ頭に浮かんでくるんですが、この前つい最近の新聞で、どこかで公民館の名前をコミセンに変えたっていうような記事、コミュニティセンターに変えたっていうようなね。名前変える必要はないんですけど、やる事業としてはそういうセンター的な、地域住民のなんでも相談を受けられる場所、あるいはその相談から実際の行動に繋がられるような、そのような機能を考えていけたらなという気がします。

僕自身は公民館利用したことがないんですが、岩城に、鶴潟に転居して実はうちの妻がスマホを持ったんですが、使い方がわからないという時にですね、岩城のウェブでスマホ教室やったんですね。一度行っておいでよって。それで、通ってですね、いづらか使えそうになって、少なくとも今の僕より使えるんですね。ですから、この SNS も一つテーマになってますので、改めてですね、そういうスマホ教室とかですね、そういったことを高齢の方に教えるような、そういうのも必要じゃないか、あればこう利用者が増えるんじゃないかなんてことを考えました。ちょっと身近なところから考えてみましたが、以上です。

湊市長

ありがとうございました。それでは、佐藤教育長職務代理者お願いいたします。

佐藤教育長職務代理者

今年は入部400年の件で大変由利本荘市にはお世話になりました。これによりまして、しかも各公民館でうまく取り上げていただきました。これによりまして、子供も大人もすべて楽しみながら学べるという良い機会になったんじゃないかと思っております。これもやはり生涯教育の基本でありますし、公民館側といたしましては、本当だと若い人たちは公民館にあまり来なんですね。子供と一緒にじゃないと。その代わり高齢になりますとやはり行き場がないっていうわけではないん

ですけども、やっぱり公民館に何かを求めて、まあ高齢大学みたいなものもありますし、そういう点でこの様々人が集まるという点ではとっても必要なことだと思います。ハイブリッドに関しましても大変いいことだと思います。と言いますのは、私ももう老年に差し掛かってまいりましたが、あの私たちの世代よりちょっと上の世代でもうスマホとかパソコンとか昔の人に比べればかなり上手に使います。アレルギーないんですよ。ですからそういう点では、どっちでもできるそういう行事を増やし、いわゆる講演会みたいなものでも、その場に行っても見れるし、あと配信等でゆりほんテレビもありますし、ユーチューブもあります。様々メディアも今ありますので、そういうところを通してとにかく広くいろんな方々に見てもらって学ぶ楽しさを知ってもらおうという点ではこのハイブリッド公民館、とってもいいことだと思います。当然これもね、資金がかかります。それをどうにか続けていただきたいと思っております。

また、地域性に関しまして前に地域のブロック化というののちょっと話しがあったんです。その中で私はちょっと不安だったのが、北部と由利、東由利が一緒になるという案があったんですよ。遠いよなと思ひましてこれはまあ、ちょっと再考をお願いしたいと思ひますが、でもやはりこの地域によってまとまって行くことも必要な点も出てくると思ひます。それ以上にこの合同事業というのは、これからは基本にして公民館単体ではさすがにできない事業を、他の地域と一緒にすることが大変必要になってまいります。ただこれに関しまして、この間の報告を見ましても、小学校のキャンプでも片方の地域では参加するけど、片方の地域では参加していなかったとか、やはり来にくいところ、入って行きにくいところはまだあるのかもしれない。これはむしろ2カ所だからそうなったのかもしれない。これが3カ所4カ所の公民館がまとまってやる分には多分遠慮なくなってくると思うんですね。そういううまい具合のやり方を考えていただければと思ひます。特に地域に関しましては、鳥海地域なんかの場合は、あの伝承の派遣ですね。それを今やっております。多分、これ他の地域でもこういう伝統芸能等はあるわけでございますので、そういう発信基地、そして仲介する場所としての公民館というの、文化面での大変必要なことだと思いますので、これはぜひ真似しながら続けて頂ければと思ひます。

最後にあの私、20年ほど前まで10年ぐらい町内の公民館長やりました。あの頃、年に4回ぐらい中央公民館に集まりまして会議を開いた記憶があります。この当時はまだ運動会とか市民運動会ですね。あとワールドゲームとか、それでとにかく盛んに公民館の事業もありました。また、中央公民館だけでしたが、石脇地域、あと東部地域とかそれぞれ公民館が活動していたそういう時代もありましたが、今、あれがなくなった理由は、やはり参加者がいなくなった。やはりみんな個人個人の活動がメインになって、町内とかそういう大きいものに入って協力しながらやっていくという風潮ではな

なくなってきたんです。子供たちがいれば、その子供たちの活動でみんな集まってやるんですが、それ以上のことはしなくなってきました。ですから、その点でも先ほど言いましたハイブリッドというのは結局行かなくても家でも見れるそこで学べる、学びながら見るだけでも結構学びてあるんですよね。いや、本荘ってこういうことやってるんだとか、そういう発見がありますので、是非これを活用しながら、今はやはり昔とは違うやり方で行っていただければと思います。

その代わり、やはりこのデジタルにアレルギーある人も当然いるんですよ。都市部じゃなくても若い方でもいますので、そういう方々にも参加できるようなやり方、うまい具合にさじ加減を使って考えていただきたいと思っておりますので、私たちも協力しますので、よろしく願いいたします。

湊市長

ありがとうございました。そうすると私の方から、ハイブリッド公民館がかなり高評価ですけども、せっかくですから現場の方からということで、柴田課長からも一言、後でお話していただきたいと思っております。

いろいろとお話いただきましてありがとうございます。公民館ですけれども、私も前に言ったか言わなかったか、市長なる前まで十何年間かな、生涯学習奨励員をずっと岩城の方でやってまして、実は続けたかったんですけど、さすがに市長がそれを続けられないでしょうということですね、首になりましたけども、大変楽しかったです。生涯学習奨励員でいろんな方々と関わる中ですね、ずっと毎年やってたのが、ちょうど冬休みの頃、12月の中旬ぐらいか、それぐらいの日曜日にですね、小学生の子供たちに声をかけて、子供たちと親の人と一緒に来てもらってですね、クリスマスリース作りっていうので、みんなと一緒にクリスマスリースを作るのと、それから竹をいっぱい切ってきてですね。竹をこう切って要するに門松をみんなで子供たちと一緒に作るっていうのをずっとやってました。不格好なんですけども、三本竹を斜めに切ってですね、合わせてこうやってって、私の我が家のうちの門松はいつも私の自作の門松を置いてましたけど、そういうのを毎年生涯学習奨励員の岩城の会でやってですね、子供たちがその後、たぶんクリスマスの日が多分ご家庭で自分たちが作ったクリスマスの飾りとかでやってたと思います。たぶん、門松も各ご家庭でそれで使っていたらうなって思います。そういった活動をしていますよってというのは、やっぱり他の生涯学習奨励員の方々にも紹介したりするとですね、さっきの話じゃないですけど、そっちはそっちで私たちはこんな活動してるよっていうのも紹介しあったり、後は、まあ視察と称して他地域に乗り込んで行ってですね、一緒にやらせてもらったりとかってというのは、すごく楽しかったなっていう思いがあります。

こういった公民館のいろんな事業も同様に先ほど以来そういう話もいくつかありましたけども、他のところの事例紹介であったり、非常にいいのではないかなど、また、移動公民館のようなものとか、色々と紹介をいただきましたが、そこでですね、先に中央公民館とか話がありましたので、せっかくですから、現場の方から何かあればお願いします。

柴田本荘教育学習課長

中央公民館の柴田です。市長のご指名ですので、中央公民館の話が出ましたので、実は皆さん、来年ですね、由利本荘市、我が社もようやく20歳になります。20周年です、由利本荘市。実はこの中央公民館、旧本荘市時代から数えますと昭和の大合併で旧本荘市、本荘町と六地区の村が合併したのは昭和29年の3月です。その時から中央公民館がございます。ということで来年、中央公民館の方が70周年ということで、すみません由利本荘市よりも年月が過ぎているということで、この70周年の重みとそれから苦難の日々がございましたけれども、実は去年までやはり新型コロナで3年間休み同然でした。やりたくても企画したくても公民館主事、3年間、実は何もできないような苦しい時代、静かな時代でした。その時に先ほどのハイブリッドという言葉がありましたけども、アナログではなくてデジタルで何とかリモートで住民の皆さん、利用者の皆さんに公民館を肌で感じてもらいたい、あの苦難の3年間を経て、今度今年、コロナがようやく5類にレベルダウンしたということで、この4月からですね、アナログということにはなりますが、人と人が触れ合う肌で感じ合える、物理的にも格差の感じることはない本来のアナログの公民館に戻ったということで、特に市長にはこの間、北内越の第59回市民運動会に出ていただきましたけども、北内越地域は大体700人程度の集落ですけども、この人たちが湊市長が来るということで、大分テンションも上がったようですけども、開会式で力強いエールもいただいたりして、ということで普段見えないようなおじいさん、おばあさんまで来ていただいて、本当に顔と顔がふれあう、アナログまさに本来の公民館ができたという出来事がありました。

由利本荘市は最近の人口が7万2千人を切ってしまいましたが、65歳以上の人口が40%近く、39%のはずです。元気な高齢者がたくさんおりますので、秋田県は、実はやっぱりご多分に漏れず、最近の高齢者ランキングで男性が46位です。下から2番目で女性はまあちょっといいんですけれど41番目で一番の長寿の県が長野、男性が滋賀、男性の2位が長野です。女性の場合は滋賀。2位が今度出張で市長が行かれる岡山が女性第2位でございました。特に長野県が教育圏ということで高齢者の方々がなんで長生きが多いのかなってことですが、国民健康保険中央会というところありますが、そこの調査、たしか正確であれば市町村向けの栄養士に関する

研究がありますけども、公民館を利用した社会教育活動が高齢者の生きがい作りに大きく寄与していることは長生きにつながっているという研究結果もありますので、元気な高齢者の皆さんが中央公民館を含め、各地区の公民館を利用させていただいて、このみんなで話し合っただけで名付けましたアナログ足すデジタルが有効性のあるハイブリッドの公民館として、これからの新しい20周年の次のまた20周年に向けて進化した公民館になるよう、我々も努力していきたいと思っております。

あともう1点、本荘地域は人口の57%なのでいいんですが、東由利は2,800人位しかいませんし、ここでやっぱりつながりが大事なのが地域と公民館と学校ですね。この学校が多分キーポイントだと思います。東由利に東由利小学校の校長、私の義理の兄ですけども、やっぱり東由利に行ってみて痛切に感じたことは、やっぱり学校の存在っていうのが、地域の人たちにどれだけやっぱり力になってるかということで、ぜひ学校を利用させていただき、そのハブ機能になるのは、もしかしたら公民館になるかもしれないということで、東由利の公民館長には頑張れということでエールを送っていただきたいと思います。

湊市長

ありがとうございました。実際の現場っていうんでしょうかね、担当している側からの話も少し伺ったところであります。いずれ皆さんから色々と話を伺いますが、大変参考になりましたし、今ですねちょっと学校の話もありましたけど、先ほどの桑山委員の方からですね、認知症の関係、要するに公民館のいろんな事業がですね、認知症との関わりってすごい何ていうのでしょうか、まあ面白い表現、すごく参考になる意見だなと思っておりました。

そういうのが私の立場だから今言えるのかわかりませんが、役所の中って、やはり縦割りでできていてですね、多分認知症の人たちと公民館を繋げるって発想は多分、教育委員会にはないっていうか、なかなか違うとこなんですよね。認知症の部署が別なものですから、なかなかそれが多分、だから、こういう場所じゃないとそういう発想とか、繋がりってのは出ないなと思ってですね、すごくいい視点だし、同様にさっき学校のことでもありまして、同様のことがその縦割りを超えたところでやるともっと有効な機能するようなものがあるのではないということですね、大変参考になりました。

その後も教育委員会と、また今度、そちらの担当部署とは、いろんな協議の中で。後は振りませんが、お金については総務部長もここにいますから、財政の方のこともいろいろ考えながらですね、大変色々と参考になる意見をお伺いさせていただき、ありがとうございました。アナログ、デジタル、私もデジタル化っていうのはどんどん進めています。でもアナログもしっかり残すんだと。アナログを大事にしつつ、デジタルを進めて行くって、しっかり明文化して

やっていますので、まさしくハイブリッド公民館というのはやっぱりいいのかなと思います。まあ、色々と話を伺った中で、教育長いかがでしょうか。お願いします。

秋山教育長

先ほどの桑山委員の話の中で、私自身もなるほどと思ったのが、1つは支援学校とか、そういう子供たちが学校に行ってる間にはいろんな関わりがあるんですけども、そこから出て社会に出た時に割と閉鎖的になってしまっていて、それに対して公民館の中でいろんな関わりを持とうという、そういう企画があってやってるんですけども、それってもう一回見直して丁寧にやっていかなければいけないとか、大切に考えていかなければいけないなってしみじみと思いました。それから今日の話の中で私、失敗したなと思うのは、あの各地区の公民館長を呼べばよかったなってしみじみ思いました。

いろんな意味で今日の話は、これからの社会教育をもっていく上で、すごく考えなければいけない話をいっぱい出していただいたので、それが大きいなと思いました。それから、生涯学習っていうか社会教育ってなんだかんだ言って最後はやっぱりここに住んでいる自分をどう伸ばすっていうか、生きる場にしたいなって思う人を作っていくっていうか、そう感じさせる活動がいっぱい欲しいんだなって。それがやっぱり地元に戻ってきて、それなりに定住するって、そういう1つの大きい力になるんじゃないのかなって意味での生涯学習。ずっとあまり取り上げて来なかったことですけども、今日はいろいろなお話をさせていただいて大変勉強になったし、これから活かしていきたいなと思ってます。ありがとうございます。

湊市長

ありがとうございました。そういうことですね。色々と社会も変わってきてますけども、しっかりとまた今のご意見、皆さんのご意見を反映させていただいて、進めさせていただきたいというふうに思います。ありがとうございました。

それではここで意見交換の部分を終わりまして、最後にその他に移らせていただきたいと思いますと思いますが、せっかくの機会であります。皆さんの方からその他なんでも結構ですけども何かございましたらお伺いしたいと思いますが、何かございませんでしょうか。

佐藤教育長職務代理者

本当にいつも大変ありがとうございます。特にこの近年は各学校の新築改築、さらに環境整備で本当に予算をとっていただきました。ありがとうございます。それでまず予算も関係あるようなお話でありますが、前にも話したかもしれませんが、タブレットですね。今は個人に貸し与えて6年間、そして3年間、貸し与えてそれが帰

ってくるというパターンになってるんですが、これを可能であれば9年間使い切ってそのまま、その子に預けるという買取式の方法を、買い与えるという方法はいかがなものか。やっていただきたいなという点が一つあります。学校給食に関して、給食費ですね。やはり払えずに難儀している家も結構ありまして、督促はしていても未納という家も結構あるんです。これはやはり可能であれば、今後、考えていただきたいのはやはり完全無償化というのを前提に進めていただければと思っております。

これは当然お金がかかることでして大変なことだと思いますが、子供のため、補助金を各家庭に配るのも大事ですが、そのうちの少しでもこっちに回してもらえれば、無償化になるんじゃないかという、その可能性も含めて、ちょっと検討いただければと思っております。

それからですね、生徒数はこれから減少の一途なんですけど、今度は教師の不足になってきております。さらに子供たちに関しましては、学習、生活のサポートの必要な子も結構多くなってきております。そういう生活支援の先生方を今まで並に、もしくはもう少し増える可能性もこれから出てくると思います。そちらも今後増えてくることを考えて準備していただければと思っております。

また、今後の学校のあり方なんですけど、特に東由利、鳥海地域では子供たちがかなり減ってまいります。各地域1小学校1中学校という基本は、私はできるだけ変えたくない気持ちがあるんですけど、私たちがそう思っているけど、その地域でどう思っているのか。今後、まずは減っていきそうな可能性があるところから早めにリサーチをし、その地域の住民の方々に今後学校をどうしたい、どうありたいということを聞いて、アンケートをとってそれを地域にフィードバックしながら共に考えていこうというのを進めなければならない時期に来ているのではないかと思いますので、そちらもお願いしたいと思っております。

最後に部活動の地域移行もですが、公民館事業もそうなんです。文化・スポーツ課、体育協会、今体育協会といわないような気がしますが、スポーツ協会、それと芸文協、このそれぞれがもうボーダレスでやっていかなければならない時代だと思います。部活にしてもそうです、公民館事業にしても、これが各課云々じゃなく一緒になってそれぞれの事業に向かっていけるような、そういう方法を、これからボーダレスで活動してくださいというお願いでございます。以上です。

湊市長

それでは、桑山委員からは何かありますか。

桑山委員

ちょっと最近考えていることの一つに、教育委員会定例会で出さ

れた資料の中での給食費の滞納ですね。給食費もそうですが、いわゆる学校納付金っていう義務教育は本来、国民の経済的な負担なしで全部国民に受けさせる義務が国にはあると。受ける権利が国民にはあるっていう中で、そこまで振りかぶらなくてもよかったのかもかもしれないんですが、学校の父兄の中の給食費関係ですね。これを何とか、これはもう由利本荘市単独では多分無理だと思うので、これはもう国がその方向をしっかりと定めないとなかなか市単独ではできないんですけども、これからの長期的な目標として、義務教育を受けるに関わる費用を極力抑えていく方向というものを常にですね、国に求めていってほしいなということ。もし、単独でできたらこれはすごいと思うんですが、もしかしたら移住者が増えるんじゃないかという期待もできるんですけども。まあ、義務教育における学校の交付金のあり方っていうものをちょっと考えていただければと思います。

それと同じく、教育を受ける権利の中で、由利本荘市は教育支援センターを充実させる方向に来たっていうのは、すごく評価しております。先月ある中学生が来まして、学校でいじめにあって学校行けなくなっちゃったと。もう本人はすごく勉強する意欲はあるけれども、学校に行ってもなかなか空いてる先生方が個別に対応して勉強を教えるっていうのはなかなか難しいと。僕はすぐふれあい教室を提案したんですが、遠すぎて行けない。送り迎えができないっていうことでした。ということで教育支援センター、特にあの不登校の児童生徒に対する支援っていう観点で、そういう登校の送迎ですね。何かいい案があって、交通の手段がなくても勉強する気があれば行けるよという方向で考えていただきたいなということ。この2点をちょっと今日考えてきました。

湊市長

わかりました。では小坂委員からもお願いします。

小坂委員

私もこの教育支援センターが理科センターにできたんですけども、通うことができない子供たち、あるいは、そこまで親が送れないということで、通えればって思う子供たちがたくさんいると感じております。そういう子どもたちのために校内教育支援センターという教室を作って、そして校内で自分の学級の授業、オンラインで受けられるような、そんな仕組みができればと。保健室登校していても授業は受けていないわけです。ですから、その空き教室を一箇所作って、そしてWi-Fiをしっかりとさせてオンラインで教室を結ぶことができるような仕組みをきちんと作って、その子がそこに行って教室の授業に参加したいと思った時には、そこで授業を受けることができるような、そんな仕組みができれば、遠い子供たちも教育支援センターに行けない子どもたちも授業を受けることができ

て、少し助かるのではないかなということを感じています。

それから、もう1つ別の話なんですけれども小学校では空き時間というものがありません。担任の先生たちは1時間目から6時間目までずっと授業しているんですよ。理科の実験をしようとしても前の日に実験の準備をしておかなければ、実験をさせることはできない。そういう中で授業している先生が大変多いんですが、働き方改革で早く帰らなければいけないということもあって、遅くまで学校に残っていることも、準備のため残ることもできなくなっている現状なんですね。そういう中で先生たちは理科の得意な先生は、それでも仕事はうちに持ち帰って準備を理科室でっていう先生もいるんですが、だんだん忙しさが増してくると、教師実験で先生がこう実験を見せて自分で実験しないで、一つだけの実験準備だけで授業が終わってしまうといったことが現実にはやはりあるんです。そういう中で打ち込むまではいかなくても、生活サポートの先生のような理科準備実験準備、大学であれば技師なんですが、そういう方を複数、各学校に1人でも配置していただいて、体験的な学習がしっかりできるような、由利本荘市は科学教育に力を入れるっていうことになっているので、本当に五感を使って学びを深めていくことができるような、そういう学校ができればいいなということ、いつも自分は理科専門なものですから思っていて、自分で現職の頃は手伝うことができれば手伝っていたんですが、それでもやはりなかなかできない。そして校内を一巡しているとそのような現状になってしまっていることもあるので、できればそういう方がいて、していただければ。子供たち一人一人が触って体感して理科好きの子供が育つのであって、先日、学校では素晴らしい実験をその先生が準備して、女の子が目を輝かせて実験してて、理科好き、大好きと答えられて感動したんですけど、そういう体験はどの子にもさせたいと感じております。よろしくをお願いします。

湊市長

ありがとうございました。それでは、佐藤委員をお願いします。

佐藤委員

私の方からは、様々、行政の方でも新しいことを始められようとしていると思うんですが、そんな時にそれを阻む圧力って一体何かとか、それを推進するとか進めていく力って何かかなと思った時に、数字も大事だし、お金も大事なんですけど、結局意識なのかなと思っています。みんなが、新しいことにチャレンジする意識というのを根底に持って取り組んでいければいいかなと思っています。ちょっと教育委員会のお仕事でまとめたものではなくて、自分の仕事の中でまとめた資料の中に、私は割と人生、人より間違ったり失敗をしたりすることが多い方なんですけども、その時にもう一回ちょっとポジティブに行ってみようと思おうとした時、今まで自分は

どんな本を読んできたかなと、一度本棚に向き合うことにしました。それで思い出した言葉があったんです。それが復古創新という言葉で、まあ温故知新に似たようなものなんですけど、ちょっと違って復習の復に、古いという字、そして創るという字で創、新しいという字で復古創新という言葉がありまして、先人の生きてきた過去から本質を理解し、未来からの視点で創造する、古き良きものを残しつつ、未来からの視点で、新しき良きものを作るという意味があるそうです。この言葉を何度もこう噛みしめて、今自分はやりたいこと、本当にやりことは何かと考えた時にももちろん、過去から学ぶこと歴史を学ぶことが未来を作っていくことなんですけど、やはり新しきものを作る時は、常に未来からの視点で作っていかねばならないんだなというように、みんなが理解することが大事なのかと思っております。やはり変わるのは怖いですし、スマホ1つにしても使い方がわからないだけで情報が入ってこないと思うと、何かもったいないままだけれども、その操作方法を学ぶのも億劫で、そんな時に身近な公民館でスマホ教室がやってるよ、なんてことがあると急にこう未来は開けていくんだと思うので、ぜひその未来からの視点でこれからのイベントもどんどん企画していったほしいなと思っております。

湊市長

ありがとうございました。それでは教育長、いかがですか。

秋山教育長

こういう話ってなかなか教育委員会の中でも時間をかけてすることができなくて、この機会は非常に大きいなと思っております。教育行政は教育委員会だけでは絶対できないので、そこをなんとか市全体の取り組みとして、この市で教育を受けてよかったなって、この市で生きてよかったなって言えるような教育委員会の取り組みにしていきたいと思っております。今日の意見を参考にして、いろんな政策に生かしていきたいと思っております。

湊市長

ありがとうございました。本当に様々なご意見をいただきました。すべてメモをさせていただいて、すぐにですね、もちろんその叶えられること、できないことっていうのはもちろん多々ありますけども。大変参考になるご意見を多々いただいたなと思っております。

国の方でも、今、異次元の子供に対するですね、なかなか異次元なんだかと思うところもありますが、いろんなことがあって、もう少し踏み込んだものやってくれるように、色々私からも機会があれば要望もしていきたいと思っております。先ほどから出てましたお金、お金がないのはもちろんそうなんですけども、ないって言っちゃえ

ばそれまでですし、あんまり、それこそね、由利本荘市も500億円ぐらいの予算で動いてますから。まあ、ほとんどはその行き先が決まっている、そういったものがほとんどですね。自由に使えるお金ってごくごくわずかなんですけども、とはいえ、500億で動いてる市がですよ、ちょっとぐらい、ちょっとというのはその微妙な、渋い顔されるから微妙なところでしょうけどね。あんまりナイナイっていうと、少し夢を広げる予算も取れないわけでは全くないわけですから、その辺もですね、少しくまくバランスとりながら考えていきたいなと思っています。いずれ、最後お話いただいた、未来からの視点って、未来を見た視点じゃなくて、未来からってことは先からこう見返すような視点でという意味なのか、なかなかそれも面白い発想かなと思ったりしてました。

いずれ先ほど話がありましたとおり、由利本荘市も20年、やっとお酒が飲める年になりましたけども、今いろいろとお話を伺ったところもしっかりと参考にさせていただいて、市政運営も進めて、しっかり教育委員会とも連携してやっていきたいと思いますので、大変、長時間にわたりまして、貴重なご意見を頂きまして、ありがとうございました。以上で、まずこの教育会議の方は閉じさせていただきます。進行を総務の方に戻したいと思います。

遠藤総務課長

皆様の活発な意見交換、大変ありがとうございました。今後とも教育委員会と私たち市の方で連携しまして、未来の本市を担う子供たちのより良い教育環境、充実を図ってまいりたいと考えております。それではこれもちまして、令和5年度の総合教育会議を終了いたします。本日はありがとうございました。

【15:20 終了】